

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 30 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26780478

研究課題名(和文) 在日外国人若者のキャリア形成と移行支援に関する研究

研究課題名(英文) A Study of support system for young people with mixed heritage in the transition from school to work

研究代表者

今井 貴代子 (IMAI, Kiyoko)

大阪大学・人間科学研究科・招へい研究員

研究者番号：90710236

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：外国にルーツをもつ若者たちが集まる活動や場への参与観察とインタビュー調査を通じて、彼ら彼女たちが経験する「学校から仕事へ」の移行における困難や差別の諸相と同時に、必要なネットワークや場づくりのプロセスについて明らかにした。同質性の強い職場環境や差異が語られない社会を生きるなかで、いっそう当事者が集まる契機や場の発生、つながりの希求が求められていた。そこでは協働的な営みを通じて共同性が立ち上がり、それぞれの当事者性を取り戻すための抵抗文化の創造や語りの(再)構築のプロセスが見られた。

研究成果の概要(英文)：Based on the participant observation and interviews to young people with mixed heritage, this study aimed to clarify not only the various aspects of difficulties and discrimination in the transition from school to work but also necessary supports for the resistance. They have difficulties and isolation in a society and workplaces of homogeneity where the differences are excluded or not exchanged in everyday life. So they have aspirations of their communities that enable them to share each experience and each feeling in dialogue.

研究分野：教育社会学

キーワード：在日外国人 若者 キャリア 移行支援 ネットワーク 居場所 語り アイデンティティ

## 1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進むなか、日本の公立学校にもニューカマーと呼ばれる外国人の子どもたちが多数在籍するようになった。しかし、サポートや環境改善については十分とは言えず、文化的適応や言語の問題、差別やいじめの経験、またそれらに起因する学力の低さや自己肯定感の低さによって、子どもたちは十分な教育機会や教育達成を得ていない現状がある。

教育社会学分野では、子どもたちが学校の中で直面する日本の学校文化や学校制度の排他性及び差別性を、参与観察をもとに実証的に明らかにする研究が蓄積されてきた(志水宏吉他 2001、清水睦美 2006、児島明 2006 ほか)。近年、注目を浴びているのが、外国人の子どもたちの不就学の実態や高校進学率の低さであり、その後の進路である(志水宏吉他 2008 ほか)。外国人の定住化が進むなか、教育達成や<学校から仕事へ>の移行は、子どもたちの人生に大きな影響を与える重要な問題となっている。

若者一般の<学校から仕事へ>の移行課題は、教育社会分野では定着してきているが(本田由紀 2007、乾彰夫 2010 ほか)、外国人の子どもや若者たちにまで視野を広げたものは少ない。また、欧米の諸外国では、移民の若者たちの進路、生活や意識の実態を、エスニシティだけでなくジェンダー、階層と交差させ、アイデンティティや差別と絡めてホスト社会にどのように統合しているかといった点から、多面的に若者の実態を把握しようとしている。日本においても、教育機関を経た在日外国人若者たちの現状を多面的にとらえる実証的研究が求められている。

申請者はこれまで、外国にルーツをもつ子どもや若者を支援する「地域子ども会」や「地域国際交流会」、「支援者ネットワーク」を中心にフィールドワークを行ってきた。10年近くがたち、現在若者となった彼ら彼女たちの「その後」からは、当時の聞き取りで得られた将来展望や進路とは異なった<学校から仕事へ>の移行が見られた。大学中退、繰り返される転職、非正規雇用、女性に多い結婚や妊娠による学業や夢の断念、職場での差別、人間関係での躓きなどである。他方で、親族や友人、支援のネットワークが彼ら彼女たちの生活を下支えしていることもわかった。

以上の背景から、申請者は、これまで子どもに焦点を当ててフィールドワークを行ってきた経験とネットワークをもとに、子ども期を経た若者たちの抱える課題をキャリア形成の観点から読み解き、<学校から仕事へ>の移行支援の実践的課題を明らかにすることを課題とした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、在日外国人の若者たち

(10代後半から30代半ばまで)の<学校から仕事へ>の移行過程におけるキャリア形成を把握し、それに対する移行支援の実践的課題について関係団体や機関、若者当事者との協働実践によって明らかにしていくことである。そこで本研究では以下のことを明らかにすることを目標とした。

(1) 海外も含めて外国人/移民の若者たちの<学校から仕事へ>の移行やキャリア形成に関する図書や文献をレビューし、先行研究や課題を整理する。同時に、在日外国人若者のキャリアや移行支援に取り組む関係団体・機関に聞き取りを行い、現状と課題を整理する。

(2) 在日外国人若者へのインタビューおよび参与観察を行い、過去・現在・未来を軸に彼ら彼女たちのライフストーリーをキャリア形成の観点から分析し、<学校から仕事へ>の移行過程における困難や課題、支援ネットワークを明らかにする。特に、日常生活の中で経験する差別やアイデンティティの諸相に注意を払う。

以上のことを通じて、在日外国人若者の<学校から仕事へ>の移行過程における社会的な問題やキャリア形成を実証的に把握し、それに対する移行支援の実践的課題について関係団体や機関、若者当事者との協働実践によって明らかにしていくことにした。ただし、「3. 研究の方法」で述べるように、若者が集まる場への参与観察にあたり、その場で生まれる実践の経過を長期的にかかわって把握する重要性が感じられたため、本研究期間を終えた今後も継続して協働実践を行っていき、考察を深めることになっている。

## 3. 研究の方法

### (1) 基礎調査

国内外の外国人/移民の若者の<学校から仕事へ>の移行に関する先行研究をレビューすると同時に、在日外国人の若者が集まる場をつくっている支援団体やスタッフへの聞き取りや訪問調査を行った。親がニューカマーであり自身は日本生まれという二世や国際結婚のもとに生まれた若者が増えていることから、課題はそれぞれにおいて個別性はあるが、幅広く外国にルーツをもつ若者をとらえることにした。

### (2) 在日外国人若者が集まる場への参与観察およびインタビュー調査

申請者は、大阪にある地域国際交流協会が外国にルーツをもつ若者を対象とした活動の立ち上げをサポートし、スタッフとして運営にかかわり参与観察を行なった。この活動は、外国にルーツをもつ若者当事者によって運営がなされており、居場所づくりや表現活動、講座の開催などが実施されている。どの

ような若者がどういった経緯でこの場につながり、何がその場で行なわれているのか、そうした場自体が何を意味しているのかを考察しつつ、同時にそれらを創り出していくことに主眼を置いた。研究期間内に彼ら彼女たちにインタビューを実施し、またスタッフや外国にルーツのない参加者への聞き取りも行った。

これまでの大阪におけるフィールドワークで得られたネットワークや経験を活かし、教育機関を経た若者たちへのインタビュー調査を実施した。特に「地域子ども会」で小中高と継続的にかかわってきた元子ども若者たちを対象にして、その後どのような人生を歩んでいるかを<学校から仕事へ>の移行に特化した形の聞き取りを行った。

### (3) 支援に関する実践研究

(2) で述べた外国にルーツをもつ若者の活動にスタッフとして長期的にかかわった。研究期間内ではそこで得られた知見や課題をその都度関係者と共有し、実践に反映させていく方法をとった。そうした実践からのさらなる課題解決に向けては継続的にかかわりながら深めていくことにしている。

## 4. 研究成果

本研究では当初、幅広い教員ネットワークを通じて若者たちの実態を把握することも想定していたが、地域で実践されている若者の活動に焦点を当てて参与観察やインタビュー調査を行うことにした。高校卒業後の追跡が困難であることに加えて、地域で生まれる場に当事者が集まるその契機やつながりの希求にこそ考察の意義があると考えたためである。さらに当初はニューカマーが対象として考えられていたが、参与観察や関係機関への聞き取りを通じて、<学校から仕事へ>の移行における必要なネットワークはニューカマーに限らないことも明らかになった。本研究を通して、以下のような知見と課題を得た。

(1) 小中高では比較的に学校や地域からのサポートにあったのに比べて、大学に進学した場合、大学期において個別的・具体的なサポートを得られず困難を抱えている。

大学期において、それまでのサポートによって底上げされていた学業へのモチベーションを維持するのが難しかったり、大学生活や単位取得、就職活動に関する情報や価値観にズレが生じていたり、経済面での課題が大きく、<学校から仕事へ>の移行において困難が見られた。特に小中高時代に来日した若者は、「日本人」を前提にした就職活動に馴染まず、「留学生」を前提にした就職活動にも該当しないため、就職活動を途中で断念するケースも見られた。日本社会でこれまで典型

とされた「学校を卒業し、間断なく、正規雇用で就く」という移行モデルが揺らぎを見せるなかで、外国にルーツをもつ若者たちにとってそうした移行はいつそう難しい。ただし、そうした場合においても、親族・知人ネットワークによって仕事を紹介してもらったり、支援現場や母校に自らつながることによって必要な情報やサポートを得ていることがわかった。

(2) 外国にルーツをもつ若者たちの就労状況からは、幅広く日本の若者が直面している非正規雇用や不安定な経済状態が見られる。加えて、ポジティブな評価では「日本人」のように扱われるのに対し、ネガティブな評価をされる際に「外国人」という点が有徴化される(=差別される)。

(3) <学校から仕事へ>の移行において、同じような外国にルーツをもつ若者が集まる場が求められる。

外国にルーツをもつ子どもの教育課題についてはこれまで多く指摘され、学校や地域NPOなどで取り組まれてきたが、学校期を経るとこうした課題への関心は薄まるのが現状であった。しかし近年さまざまな地域で、若者の居場所や発信の場づくり、就労支援、若者支援、交流会、同窓会などのかたちで取り組みが進められていた。居場所は一つであるというより複数存在し、それらをまたぎ、つなぎ合い、時には葛藤や違和を内包するような場であった。

そうした場の特徴としては、外国ルーツであることをとりたてて主張もしないが隠すこともなく、さまざまな人の話を聴いて話を共有できることである。就労しながらそうした場とつながるのは難しいため、こうした場が近いところにあり日常的に行けることや、ソーシャル・ネットワーキング・サービスなどでつながっている感覚があること、学校の教員などがそうした場やつながりの受け皿を担っていることが重要であることがわかった。

(4) 外国にルーツをもつ若者が集う場には、共同性における語りの(再)構築のプロセスが重要である。

継続的にスタッフとしてかわり参画観察及び若者たちにインタビューを実施した若者たちの活動現場には、ニューカマーに限らない在日韓国・朝鮮人や日本生まれ日本育ち、ダブルやクォーターなど多様な人たちが参加し、混淆の集まりへと化していた。教育機関を経るといつそう個人化と新自由主義的な力学が強くはたらき、多様なかたちのアイデンティティをもつ若者たちは、強固で一枚岩的な民族の帰属意識にあてはまらない。かと言ってみずからの力のみでネットワー

クを形成することも難しい。この活動では、協働的な営みを通じて共同性が立ち上がり、自己が語られ、語り直されていた。またそうした場に外国にルーツをもたない「日本人」も参加している。同質性の強い職場環境や社会を生きる一方で、こうした場にはそれぞれの当事者性を取り戻すための抵抗文化の創造や語りの(再)構築のプロセスが見られた。

本研究では、若者たちへのインタビュー調査と参与観察を通じて、キャリア形成の把握と<学校から仕事へ>の移行支援の課題を明らかにすることを目標とした。しかし、研究期間内において若者当事者に出会うなかで、そもそも<移行>とは何であるかという問いが生じてきた。<仕事>の世界とは一般にはマジョリティを前提にしていることが多く、働き方に関する価値観や就職活動のあり方、就労現場はまだまだ均質的であり同化的である。こうした均質化された場へ直進的に移行することが目標ではないはずであり、ましてや「成功」のモデルとはならない。実際に、若者たちの多くは仕事の世界とは異なる場として、外国にルーツをもつ若者たちの活動に参加しており、そうした場を求めている。同質性の強い社会のなかで生き抜きながら、同時に抵抗していくような<移行>というものを今後構想していく必要がある。本研究から得られた知見としては、そうした構想に、複数ある場を往還することによる共同性の立ち上がり、語りの(再)構築が重要であるということがわかった。

本研究は実践を含み込んだものとなり、当初の計画よりも時間を要することが判明した。今後は研究成果の発表と現場へのフィードバックをおこない継続的に研究していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 1 件)

今井貴代子「外国にルーツをもつ若者による混淆な場の実践」、第31回日本解放社会学会、専修大学、2015年9月4日。

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

今井 貴代子 (IMAI, Kiyoko)  
大阪大学大学院・人間科学研究科・招へい  
研究員  
研究者番号：90710236